



新しいシンクタンクによる 地域産業振興への期待

国立大学法人筑波大学

システム情報系長・大学執行役員 教授

高木 英明

毎年、4月末から始まる大型連休に学生を連れて筑波山に登ることにしている。今年も4月29日に、朝9時つくばセンター発のバスで筑波山神社入口まで行き、御幸ヶ原→男体山頂→女体山頂→つつじヶ丘駐車場と歩いた。筑波山は秋の紅葉や初春の梅林もよいが、山全体が新緑にむせかえるこの季節が一番好きだ。ふもとの田んぼには水が張られ、湯気が立ち上って、田植えを待つ大地の息吹が感じられる。対面する人に「こんにちは」と声を掛けながらのハイキングは、中国からの留学生に新鮮だったようだ。頂上から見渡す四方の展望は、かつてこの地を駆け巡り、大陸の先端技術を取り入れて地域の自立を夢見た平将門のロマンを彷彿させ、「将門ファン」の私にはたまらない。

このたび、筑波銀行では、従来のIT関連サービスにシンクタンク機能を加えて、筑波総研株式会社を設立した。その趣旨は、地域の活性化・発展に資するため、シンクタンクを筑波銀行グループの情報発信機能の中核と位置づけ、地域経済・業界動向の調査研究、専門的な情報収集・提供、企業の経営課題に対処するための支援・サポート等の業務を通じて、地域経済と産業の持続的発展に貢献することである。これは、筑波研究学園都市に対する国の政策が基礎研究から産学官連携による産業振興に重点を移した中で、地域の金融機関が「産・学・官・金融」連携に乗り出した画期的な一歩として、まずは祝意を表したい。

私が特に期待するのは、シンクタンク部門とシステム部門との連携による新しいビジネスモデルの可能性である。いま注目されている産業イノベーションのキーワードの1つに「データサイエンス」がある。これは、遍く普及した情報収集機器と情報通信網によって集積される膨大なデータを統計解析により分析し、隠れた関係性やマーケティング上のヒントを見出す技術であり、個別業務への適用には、コンサルタントによる実務知識、大規模高速計算機能、そして統計学・数理科学の手法の融合が必要である。筑波総研には、大学や研究機関の研究者を活用して、両部門の精鋭社員がこの技術をマスターし、自社だけで新機軸を打ち出す余裕がない中小企業からもアウトソーシングを受けることで、地域産業の新しい発展の方法を見つけて欲しい。

シンクタンク設立準備の一環として、筑波銀行に2011年10月に「つくば産業創造懇談会」が設置され、僭越ながら私が座長を務めさせていただいたが、約1年間にわたる毎月の研究会において、つくばの産業振興に関する現状の課題と将来への期待が議論された。そこで私は地域産業の自立（自律）を提案した。筑波総研には、学園都市在住の定年退職した研究者や学生（特に留学生）等の人材も活用して、冒頭に述べた将門の夢を実現するような地域成長戦略における主導的役割を期待する。